toeic®

IIBC

NEWSLETTER

[ニュースレター]

Vol.159 November 2026

英語で
つながる
未来へ



インタビュー

書道のすばらしさを
外国の人に伝えるなかで、
英語の必要性を日々、
感じています。

書道家
万美 / MAMIMOZIさん

Contents

[特集]IIBC グローバル人材育成事業
英語を「学ぶ」から「使って働く」へ――
意欲ある若者の海外経験をサポートする
「海外インターンシップ支援制度」

▶ My Career Story
書道家 万美 / MAMIMOZIさん

▶ TALK! わたしが英語を学ぶわけ
「英語力アップの秘訣は“実践”!?」

▶ HOT WORD
“Staycation”

特集　IIBC グローバル人材育成事業

英語を「学ぶ」から「使って働く」へ――意欲ある若者の海外経験をサポートする「海外インターンシップ支援制度」

海外で働く経験は、教科書では学べない英語や価値観に触れられる貴重な機会です。慣れない環境での挑戦を通して、語学力に加え、自ら考え行動する力も磨かれます。IIBCは、英語を使って挑戦する機会を広げるため、2025年度に「海外インターンシップ支援制度」をスタート。今回は制度を活用して海外インターンに挑戦した高橋伶佳さんに、現地での生活や学びをうかがいました。

第2期の参加者を募集中！［2026年12月18日（金）15:00まで］

インターンシップに必要な費用（渡航費、滞在費、海外旅行保険料、ビザ費用・申請料）を、各費目上限の範囲内で総額150万円まで給付します。海外の国際機関等でのインターンシップを予定している学生の方はぜひご応募ください。第2期は約10名の支援を予定しています。

詳しくはこちら

INTERVIEW

言葉は"完璧さ"を求めるものではなく理解し合うためのツール



海外インターンシップ参加者
高橋 伶佳さん
帯広畜産大学 畜産学部 共同獣医学課程6年生。2027年より北海道大学大学院の人獣共通感染症国際共同研究所（国際協力・教育部門）に進学予定。

2026年2月1日から3月10日まで、独立行政法人国際協力機構（以下JICA）のインターンシップでタンザニアを訪れた高橋さんは、現地の農業大学での疫学調査や農家の方々とのディスカッションなど多くの経験を積み、進路や考え方に大きな影響を受けたそうです。36日間の滞在のなかで得た新たな視点とは。

異文化との触れ合いが海外へ一歩踏み出す刺激に

小さい頃から動物が好きで研究への憧れがあり、帯広畜産大学の獣医学課程に進学しました。獣医学の魅力は、解剖学や生理学といった基礎医学から動物病院での臨床分野まで、幅広く学べる点です。5・6年生の2年間は腰を据えて研究に取り組める期間があり、仮説を立て、実験計画を組み、うまくいかない結果に「なぜだろう?」と考え抜く――そのプロセスが楽しくて、自分は研究が本当に好きなんだと実感しています。

中高時代は英語教育に力を入れている学校に通っており、英語が得意だったので「いつか海外で活動してみたい」という思いをずっと抱いていました。大学3年生のとき、海外の学生を招くプログラムでアメリカ人の学生たちと英語でディスカッションをした際に刺激を受け、「次は自分が行く番だ!」と思ったんです。その後JICAの青年海外協力隊のパラグアイ短期派遣に応募し、約1カ月間現地へ。パラグアイは大学の先生も同行してくださったので安心感がありましたが、今回のタンザニアは業務時間が終われば完全に一人。日常的に英語を使って生活をするのは初めてのことでした。また、現地で主に使われるのはスワヒリ語で、事前に文法書で勉強はしていったものの、実際には町中での買い物にも苦労するほどでした。

完璧でなくてもいい言葉は相手とつながるためのツール

渡航して最初の1週間は、タンザニア独特の英語アクセントに慣れるのに必死。単語の区切りが少なく早口なので、最初は聞き取りがとても難しかったです。しかし1週間ほど経つと耳が慣れ、コミュニケーションが格段に取りやすくなりました。ホテルではお湯が出ないトラブルも発生。表情の見えない電話で英語で状況を伝えるのは人生初の経験でしたが、スタッフの方が部屋に来て修理してくれたものの……結局直っていませんでした（笑）。

現場では日本人研究者チームとタンザニア獣医師との間で意見が対立することもありました。議論が紛糾したときほど「短く、はっきりと、要点をストレートに伝える」ことを徹底。相手の文化やペースを尊重し、折り合いをつける姿勢は、大きな学びになりました。

現地での交流を通じて最も変わったことは、英語を話すことへの心理的ハードルが劇的に下がったことです。日本で英語を勉強していると「正しい文法、完璧な発音で話さなければ」というプレッシャーを感じがちです。しかし現地で出会った方々は、文法が多少崩れていても知っている単語を使いながら臆することなく会話を成立させていました。

「言葉は相手とつながるためのコミュニケーションツールなんだ」と心の底から実感しました。間違っていてもいいから言葉を絞り出して会話を続ける――そのほうがより相手に伝わる。そのマインドを持てるようになったことが、私にとって最大の収穫でした。天気や風景など些細な話題から会話はいくらでも広がっていきます。自分から話題を振り、相手の言葉を拾いながら対話を続けていく感覚を、タンザニアで自然に身につけることができました。

成功体験から広がった進路――その先の夢を思い描くように

帰国後は、大学にいる留学生と話すときの心理的な距離感が圧倒的に近くなりました。来年4月から進学する大学院の研究室は留学生ばかりで、公用語は完全に英語。タンザニアでの成功体験があったからこそ、迷わず飛び込む決断ができました。

将来は自分自身の研究プロジェクトを立ち上げ、海外の現場に長期滞在したいと思っています。現地の人々と対等にディスカッションを重ねながら「現地の医療や生活に真に還元できる研究者」になることが、私の大きな目標です。

英語を勉強していると、「今すぐ海外に行く予定もないのに意味があるのかな」と思うことがあるかもしれません。でも地道に学び続けていれば、ある日突然チャンスが巡ってきたときに、躊躇せず一歩を踏み出すことができます。完璧な英語である必要はまったくありません。「伝えたい」という気持ちと少しの勇気があれば、世界中の人たちと心を通わせることができます。ぜひ恐れずに、自分の可能性を広げる挑戦を楽しんでほしいと思います。



現地の大学の研究員や畜産農家の皆さんとは、短いながらも濃い時間を過ごした。右から2人目が高橋さん



現地の畜産農家で牛の採血を行う高橋さん。日本では経験したことのないほど多くの頭数を採血する貴重な経験になった

インターンシップの報告についてはこちら

海外インターンシップ支援制度について

学生の海外での就労経験を支え、グローバル人材育成に寄与

IIBCが取り組む「海外インターンシップ支援制度」は、海外でのインターンシップに挑戦する日本の学生を対象に、参加に必要な渡航費・滞在費などを支援する制度です。

海外の大学・大学院への留学を支援する奨学金制度は数多くある一方、海外で働く経験を得る「インターンシップ」を対象とした支援制度は、まだ限られています。そこで私たちが着目したのが、海外での実践的な就業経験でした。

海外で働きながら、異なる文化や価値観に触れることで、「国際社会のなかで自分に何ができるのか」を考える機会を提供したい。そうした思いから、2025年度に制度をスタートさせました。

本制度は、国連をはじめとする国際機関でのインターンシップが決定している学生を対象としています。国際社会の課題に向き合う現場での就業経験は、学生にとって貴重な学びとなります。こうした挑戦を後押しすることで、将来、国際機関で活躍する日本人を増やしていくことも目指しています。また、一定の英語力を応募条件としています。英語を使って実際の仕事に取り組むなかで、専門性を磨きながら自身の英語力を試す機会を支援することも、本制度の目的の一つです。

IIBCが海外インターンシップに挑戦する若者を支援する意義とは

私たちがグローバル人材の育成に取り組む背景には、「人と企業の国際化の推進」という基本理念があります。

これからの国際社会を担う若者が、海外で様々な経験を積み、異なる文化や価値観を理解し、自ら考え行動する力を身につけることは、本人の成長にとどまらず、将来の日本や国際社会への貢献にもつながると考えています。

だからこそ海外へ挑戦する意欲を持った学生の一歩を後押ししたい。海外でのインターンシップという実践の場を通じて、一人ひとりが可能性を広げ、将来のキャリアを考えるきっかけを提供すること――それが、IIBCが本制度に取り組む意義です。

［経営管理部 CSR課長 真壁伸幸］

My Career Story ～明るい未来の描き方～



書道が輝く場所は、私が作る!
若者の街へ、世界へ——
奥深い魅力を伝え
書道を愛する仲間を増やしたい。

書道家
万美 / MAMIMOZIさん

9歳で書道と出会い、大学時代から書道家のキャリアをスタート。個展をはじめ、アーティスト・企業・ブランドとのコラボレーション、海外イベントなど、活動のジャンルと場所は多岐にわたる。アーティスト名のローマ字表記は万美文字を意味するMAMIMOZI。

伝統を守りながら、躍動感あふれる独自のスタイルを展開する書道家の万美さん。
海外に向けた文化普及活動は、改めて書や言葉と向き合う契機になっていると話します。

「私は新しいフィールドで戦う」そんな気持ちに突き動かされていた

もともと芸術方面に興味があり、大学の進路も美術系を考えていました。9歳から続けてきた書道を選んだのは「本格的に書道を学ぶ学生は少ないから、きっと仕事につながりやすい」という高校の先生のアドバイスがきっかけです。芸術を仕事として捉える視点を教えてくれたアドバイスだったなと感謝しています。

山口県から上京し、大東文化大学の書道科へ進学しました。書道を基礎からしっかりと学べる環境であり、高校時代からコンクールで活躍する同級生がいることは、大きな刺激になりました。同時に、受け継がれる伝統は大切に守りながら、私はもっと自由な世界を舞台にしたいという気持ちが強くありました。

私は音楽、特にヒップホップが大好きなんです。大学2年生のときにお気に入りのアーティストが所属するレコード会社に仕事がほしいと連絡してみたところ、CDジャケットのタイトル文字を任されました。これが初仕事ですね。発売時には、新宿の大型レコード店でキャンペーンが行われました。自分の作品が街に飛び出し、不特定多数の人の目に触れることは大きな喜びであり、本当に良い字を書かなくてはいけないという責任も感じました。

依頼はすべて受け、全力で取り組むうち、仕事が増えていきました。西武渋谷店で個展を開いたのは25歳のときです。展示会場だけでなく、ショーウィンドウに大きく作品を飾ったり、ファッションブランドとコラボをしたりと貴重な機会を得ました。

当時の私を突き動かしていたのは「戦うぞ」という気持ちです。伝統的な書道の世界で戦う人もいる。私はそこから飛び出して新しいフィールドで戦っている。それを証明したいという強い思いでした。

海外進出をきっかけに英語を猛勉強 現地で味わう悔しさがモチベーションに

ちょうど個展を開催した年から、海外の仕事が入るようになりました。最初の仕事はヨーロッパをまわり、書道文化を紹介するというもの。「来週から行けますか?」と言われて、即OKしました。海外経験もゼロに近かったので、時差で眠くなる経験にさえ興奮したものです。パフォーマンスだけではなく、来場者の名前を漢字で書いてプレゼントすることも。どの漢字にしようかと、悩んで悩んでひらめいた瞬間、そんな気配を微塵も見せず、堂々と書いてみせたことも懐かしい思い出です。会話は通訳の方に頼りっぱなしでしたが、相手が喜んでいることは笑顔から伝わってきます。以降、「海外の仕事も頼める人」というキャリアが加わったのはありがたかったものの、英語力の必要性を痛感しました。

すぐに英語のマンツーマン指導を受け始めて、会話力を鍛えました。役立ったのは想定問答です。「なんで書道を始めたの」「この文字はどんな意味」など、よくある質問の答えをストックしておくと、気持ちにゆとりが生まれます。仕事の打ち合わせもパターンがあるので、そのうち慣れました。

いまだに困るのはイベントの打ち上げの席。レッスンを重ねても、会話の反射神経みたいなものはなかなか身につきません。楽しそうな周囲の会話についていけず悔しい思いもたくさんしました。でも、この悔しさがあるから、勉強のモチベーションにつながる。それは実践の場でなければ得られないものだと思います。

“Outstanding!”が作った二度目の歓声 言葉があるから、さらに深い感動へ

海外での活動が増えてきた頃、ニューヨークのビルの屋上でパフォーマンスをしたことがありました。「最高」と書いて、会場はすごく盛り上がったんですが、一段落した後「ねえ。どういう意味?」と聞かれて、心の中でくずれ落ちました(笑)。

実は前日、スタッフとピザを食べたときに、みんなが口々に“Outstanding!”と言っていたんです。意味を尋ねると、「超最高だよ」って。それで翌日のテーマを決めたという流れがあったので、即座に “Outstanding!”と口にすると、また盛り上がったんです。どちらの歓声も本物ですが、言葉があることで、もう一歩深く伝えられるものがあると思っています。

最近は、日本を訪れる外国の方向けの書道体験にも取り組んでいます。ここでも想定問答のストックを作りました。漢字一文字でも、間違ったことを伝えないよう、正確に説明できるように準備します。ただ書くだけではなく「墨に含まれる防腐剤からよい香りがするんです」「紙には裏表があるんです」と小さな知識を伝えることで、感覚に届くような体験になればと思います。「ああ!本当だ」と言われると、すごくうれしいですね。

若い頃は、伝統的な書壇の世界にどこか窮屈さを感じていました。新しいフィールドに飛び出し、キャリアを重ねるなか、たどり着いたのは「この青い空のもと、書道が好きな人はみんな仲間」という気持ちです。だから弟子ではなく、書道の楽しさを分かち合う仲間を世界中に増やしていきたい。私がそのきっかけを作れたら、とても素敵なことだと思っています。



ニューヨークのパフォーマンスで書いた「最高」の文字とともに。

万美さんのキャリア「これまで」と「これから」

- 小学生のとき、学校の授業で初めて書道に触れる。すぐに魅了され教室に入る
- 大東文化大学文学部書道学科へ。在学中にアーティスト活動をスタート
- 24歳で初の海外活動を経験。英語力の必要性を痛感し、英語学習を始める
- 日本を訪れる外国人向けに書道体験教室を開始。書道を含めた日本文化を発信中
- 日本でも海外でも、国境を越えて「書道を楽しむ仲間」を増やしていきたい!

TALK!

わたしが英語を学ぶわけ

［第6回 トークテーマ］

英語力アップの秘訣は“実践”!?

様々な英語学習者の実態を探る連載の6回目。今回はIIBCが実施する「英語通訳ボランティア派遣」で通訳ボランティアに参加したお二人が登場。活動で学んだことや、実践で英語を使うことの意義などについて、意見が飛び交いました。

通訳ボランティア活動の様子はこちら



大学4年生 **上野 貴史**さん（20代）

主な英語使用場面:研究室でのミーティング、学会発表

薬学部薬科学科に所属。研究室のミーティングでの進捗発表・質疑応答をすべて英語で行うほか、学会や論文の情報収集で英語をフル活用。



IT企業勤務 **佐賀 美紅**さん（30代）

主な英語使用場面:日常業務、海外グループ会社役員の通訳

各国で事業を展開するグローバル企業の人事部に所属し、来日した役員の通訳も担当。部署の約6割が外国籍で、英語を使う機会が多い。

上野　私の英語歴は、小学生の頃に英会話スクールに通ったのが始まりでした。中高では約4分の1が帰国生だったので、英語で話したほうが楽という生徒もいて、コミュニケーションを取るために英語に触れる機会が増えました。大学では留学生のサポート経験があり、今は主に研究のために英語を使っています。

佐賀　私は幼児期から英会話を習っていたのですが、北海道の田舎育ちだったので、英語を使う機会はなかなかありませんでした。中学校でカナダ人の先生からレクチャーを受けたことで英語の楽しさを知り、大学時代は函館で、クルーズ客船で訪れる海外のお客様を対象に通訳アルバイトをして英語力を磨いていました。

上野　今回、佐賀さんとは2026年7月の「第8回東京国際合唱コンクール」で、同じ英語通訳ボランティアを務めました。現地でお会いすることはありませんでしたが、佐賀さんはどんなきっかけでボランティアに申し込んだのですか?

佐賀　私は普段、ビジネスでの通訳が多いので、芸術やスポーツ分野の英語にも触れたいと思って今回申し込みました。実は5月の「第1回 アジア・オセアニア剣道選手権大会」にもボランティアで参加していたんです。上野さんは今回が初めてでしたか?

上野　はい。研究室以外で英語を使う機会を作りたかったのが応募のきっかけです。また、私自身にピアノでコンクール出場の経験があり、現場での緊張感がわかるので、合唱団の方々と思いを共有できるかなと思ったことも理由の一つです。

佐賀　私は当日、ポーランドから来日した合唱団の通訳を担当しました。現場での進行管理やその他のサポートを行ったのですが、参加者の皆さんが安心してパフォーマンスを発揮できるように、環境を整える役割も通訳にはあるんだなと感じました。

上野　そういう雰囲気づくりのお手伝いができたことに、私もやりがいと楽しさを感じました。私はインドネシアの合唱団を担当したのですが、事前にインドネシア語での自己紹介や、「がんばって!」などの言葉を覚えていったんです。それを伝えたときの皆さんの、緊張のほぐれた表情が印象的で、他言語も学んでみたいという意欲やインドネシアへの興味がわいてきました。

佐賀　わかります! 私も指揮者の女性の経歴を事前に調べて、当日その話をしたら、とても喜んでくださいました。通訳を通じて、人と人とのつながりを感じられたのも印象的でした。

上野　現場で実際に英語を使ってみることはすごく大事ですね。

佐賀　そうですね。通訳っていろいろな現場があって、すべてを完璧に行うのは難しいことなのですが、実践して、足りなかったところは持ち帰って補い、次はもっといいパフォーマンスにつなげるという意識が大事だなと今回改めて思いました。

上野　やはり、実践しないと英語力はなかなか上がらないと思います。私も、街で困っている外国の方々を見かけたら、積極的に声をかけて案内したりするようにしています。

佐賀　TOEIC Testsを定期的に受けて、通訳の「基礎体力」を維持しておくのも大事だと思います。特にTOEIC Speaking Testは、限られた時間でどれだけ自分の力を発揮できるかどうかなので、通訳業務と近い部分があるなと感じています。

上野　そうですね。私もボランティアやTOEIC Testsの受験など、実際に英語を使ったり力を試したりする場にこれからも積極的に参加して、もっと英語力を伸ばしていきたいと思います。

HOT WORD

“Staycation”

[steɪ'keɪ.ʃən]

意味　**ステイケーション／自宅や近場で休暇を過ごすこと**

“stay”（滞在する）と“vacation”（休暇）を組み合わせた造語で、以前からアメリカでは遊び言葉感覚で使われていましたが、特に旅行が難しくなったコロナ禍をきっかけによく使われるようになりました。遠方へ出かけず、自宅周辺や近場で休暇を過ごすことを意味しています。読書や映画鑑賞などをしながら家で過ごすだけでなく、近所の公園や海へ行ったりドライブをしたり、地元のホテルに滞在するなど、アクティブな行動も含みます。

連休などに観光地へ遠出すると、旅行の計画を練る必要があるほか、人混みや渋滞に巻き込まれて逆に疲れてしまうこともありますよね。staycationは、旅行ほど気張らず、日常の延長線上でリフレッシュするための休暇の過ごし方だといえます。

staycationは可算名詞で、一般的に“**have a staycation**”や“**take a staycation**”、などのかたちで使われますが、カジュアルな会話では、“**do a staycation**”と言うことが多いです。例えば、“I want to **do a staycation** this Christmas.”（今年のクリスマスは近場で過ごしたい）といった表現ができます。また、未来については、planと組み合わせて“We are **planning a staycation.**”（近場で休暇を過ごすつもり）と言い表せます。

Illustration：本田佳世





ジュン・セニサックさん

LA生まれ・育ち・在住のアメリカ人ハーフのネイティブ英語講師。リアルな英語が学べる学習サイトHapa Eikaiwaを運営するほかPodcastも大人気!

“Staycation”の使い方例はウェブで公開中!

TOEIC® Program Q&A



Q　**TOEIC Programにおいて、問題用紙を持ち帰れないのはなぜですか?**

A　**テストごとの難易度に差が出ないよう、統計的な処理を行うためです。**

TOEIC L&RやTOEIC Bridge L&Rでは、すべての受験者に対して公平かつ正確なスコアを提供するため、スコア算出に際して「等化（Equating）」という統計的手法を用いています。等化のプロセスでは、テスト問題に対する受験者回答の正誤データに基づき、各回のテスト全体の難易度が一定に保たれているかどうかを検証しています。



そのため、もし問題が公開されてしまうと、このプロセスが機能不全に陥ってしまい、受験者の真の能力がスコアに反映されなくなってしまうのです。

こうした理由から、TOEIC Programでは問題の機密性を厳重に保持する必要があり、問題用紙の持ち帰りを禁止しています。

TOEIC L&RはTOEIC Listening & Reading Testの略称、TOEIC Bridge L&RはTOEIC Bridge Listening & Reading Testの略称。

[INFORMATION]

● 賛同パートナーを募集中！

「英語で話す一歩を、もっと軽やかに。」プロジェクトが発足

IIBCは10月19日を「TOEICの日」と制定し、英語に親しむ機会の創出に取り組んでいます。2026年度は「TOEIC Speaking Test」をテーマに、参加・挑戦・学びの企画を発信しました。

グローバル化が進み、英語に触れる機会は増える一方で、英語で話すことに自信を持てる人は、いまだ多くありません。そこで、たどたどしくても自分の言葉で相手と向き合い、英語で話すことへの心理的な壁を感じることなく一歩を踏み出せる社会を目指して、「英語で話す一歩を、もっと軽やかに。」プロジェクトを発足しました。

10月19日に行われたプロジェクト発表会では、本プロジェクトの発足を宣言し、今後一緒にアクションを起こしていく賛同パートナーを紹介、今後の展開についても発表しました。本プロジェクトを通じて、一人でも多くの英語学習者が、気後れすることなく英語を話す一歩を踏み出せる――そんな社会の実現に向けて、前向きな気運を醸成していきます。

英語で話す一歩を、もっと軽やかに。

＃英語話せますのハードル

プロジェクトの目的

①英語で話すことに対する「完璧でなければならない」という決めつけをやわらげ、英語コミュニケーションへの一歩を踏み出しやすい環境をつくる。

②賛同パートナーとともに、英語コミュニケーションに挑戦する人たちを応援するメッセージを発信する。

プロジェクトの詳細はこちら

● 日本大学・ETS・IIBCがMOUを締結

TOEIC Programを含むテストプログラムの活用で協力

IIBCは、日本大学とTOEIC Programの開発元であるETSと、英語教育の発展と学習者の英語力向上に向けた相互協力に関し、基本合意書を交わしました。8月27日に日本大学で行われた署名式には、日本大学学長の大貫進一郎氏、ETS CEOのアミット・セバク氏、IIBC理事長の藤沢裕厚、ならびに関係者が出席し、今後の協力関係に向けた意思確認がなされました。

本合意は、三者が知見を活かしながら、教育・測定・学習改善の観点から協力を進めるための枠組みを定めるものです。主な協力領域として予定されているのは、日本大学によるTOEIC ProgramおよびTOEFL ITP®を含むテストプログラムの活用、三者による取組成果の社会還元やETSおよびIIBCによる調査研究支援です。実施方法や対象範囲などについては、三者で協議のうえ順次進めていきます。



左から、アミット・セバク氏（ETS CEO）、大貫進一郎氏（日本大学学長）、藤沢裕厚（IIBC理事長）

IIBC あなたが世界をつなぐ あなたと世界をつなぐ

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

IIBC公式サイト https://www.iibc-global.org

外部からの寄稿や発言は、必ずしも当協会の見解を表明するものではありません。

本誌は公式サイトでもご覧いただけます。
https://www.iibc-global.org/iibc/activity/iibc_newsletter.html
IIBC NEWSLETTER 検索

【お問い合わせ】
広報課 pr@iibc-global.org

ETS, PROPELL, TOEIC and TOEIC BRIDGE are registered trademarks of ETS, Princeton, New Jersey, USA, and used in Japan under license. The Eight-Point logo is a trademark of ETS. Portions are copyrighted by ETS and used with permission.